

模擬裁判シナリオ：「赤ずきんちゃん」

鈴木 博 康

2025年 3 月

九州国際大学法学会 法学論集 第31巻第1・2号 合併号 抜刷

模擬裁判シナリオ：「赤ずきんちゃん」

監修 鈴木 博 康

作成：2024年度専門演習A・CT4ゼミ生¹

ここに紹介するのは、今年度の夏のオープンキャンパスにおける本学法学部企画の1つ、模擬裁判のシナリオである。昨年2023年5月のコロナの感染症法上の5類相当への扱いの変更以降、国内では落ち着きを取り戻し、本学でも授業はじめ、各種の学内行事がコロナ以前の様相に戻った感がある。この間、オープンキャンパスについては、感染防止対策で対面での実施を中止し、リモートにより実施する時期もあったほか、対面での実施においても、人数制限による事前申し込み制を採り、また、同一の内容を午前・午後の2回に分けて実施するなど、様々なやり方で実施してきた。今年は、コロナ以前とほぼ同様に実施したが、それでも変わった点を挙げるとすれば、午前・午後の2部制は実施しつつも、しかし内容は午前と午後とで異なる、という点であろうか。2023年度がそうであったように、2部制を同一企画で実施していた時は、ゼミ生が同じ模擬裁判を2回実施することになったが、今年の模擬裁判は、コロナ以前と同

1 本学部ではいわゆる「ゼミ」と呼ばれる授業としては、3年次配当の専門演習A、CT（キャリア・チュートリアル）3、さらに4年次配当の専門演習B、CT4があり、同じ学年の専門演習とCTは時間割上連続し、かつ、同一教員になるのが現在の運用である。また、CT3と翌年のCT4は原則同じ教員となり、学生も持ち上がりになる。このうち、専門演習A（とCT3）は、法学部の3年生全員がどこかのゼミに所属することになっているが（準必修科目）、専門演習Bは開講ゼミ数が限られ、履修する4年生も限定的である。専門演習Bの開講は2024年度においては3ゼミのみである（CT4は前年からの持ち上がりになるので、原則、前年のCT3（専門演習A）の数だけ開講される。）。2023年度までは当職も専門演習B（とCT4）を担当していたが、2024年度は専門演習Bを持たず、CT4だけとなった。こうして今年の4年生から専門演習Bの鈴木ゼミがなくなったわけであるが、（2023年度には専門演習A、CT3を鈴木ゼミに選択していた）2024年度の4年生の鈴木ゼミ生（CT4のみ）には引き続き、このCT4を模擬裁判ゼミとして流用させてもらって、3年生（専門演習A、CT3）とともに活動した。

様に1回の実施となった。それは上述の通り、午前と午後とで違う企画を用意したからである。ただし、参加する高校生については、午前と午後とでは、両方に参加するという申し込みでもしない限り、基本入れ替わりが生じる。コロナ下での人数制限の必要性から2部制としたという点では趣旨が異なりはするものの、同じ2部制であっても今回は午後に参加する高校生にのみ模擬裁判を披露したことになる。その関係で、今年の見学者（傍聴人）は例年よりも少なめになった。

また、コロナ以前は、午前中は主に全学共通の企画があり、昼時には学食の案内をするなどの企画を挟んでから、さらに午後の学部別の企画が用意され、ほぼ一日がかりのオープンキャンパスとなり、高校生の学内滞在時間もそれだけ長かった。このころの模擬裁判は午後に1回だけ開廷されていた。今年の2部制の午前・午後とでは内容を異にするというスケジュールは、学内的には学部企画は30分ずつ2本の企画を立てるということを予定しており、現に当日の他学部では、30分ずつの企画を2本用意していた。が、模擬裁判は以前より、30分ではなかなか収まらないことから、法学部では2コマ分をすべて模擬裁判に充てることとなった。もっとも、まるまる60分を法廷でのやり取りに充てるほどにはシナリオの内容を盛り沢山にすることもできず、通常よりはやや長めにする、という程度であった。今回、例年のシナリオよりもやや分量的に多めになっているのは、そうした事情による。

さて、今年の模擬裁判は「赤ずきんちゃん」をもとに、これにアレンジを加えながら刑事事件として展開した。例年、模擬裁判の創作方法として、既存の童話・昔話などをもとに刑事事件化していくという手法を採っているが、今回も同様である。誰もがよく知っている物語を借用することで、それがどんなふうに刑事事件として展開されるのか、興味がわきやすいということのほか、登場人物のプロフィールや役割を改めて裁判内で（劇中で）説明し直さなくて済む、という利点がある。その際、その物語における象徴的な（代表的な？）シーンを使うことが肝要である。今年も模擬裁判として展開できそうな物語をゼミ内

であたりを付けながら検討し、選考していったのであるが、選定した当初に思っていたほどに物語の象徴的な部分を用いたかということ、かなり限られたシーンを展開することになったように思われる。すなわち、オオカミに襲われたおばあさんとその孫の赤ずきんちゃんを救出した猟師が被告人となったからである。

今回の争点は、正当防衛の成否である²。原作は、お母さんのお使いを頼まれた赤ずきんちゃんが、途中、道草を食っておばあさんのところには遅れていくことになるところ、その間に先回りしておばあさんを襲っていたオオカミは、あとから来た赤ずきんちゃんも襲う。そして、そこへたまたま通りかかった猟師によって2人は助けられ、事なきを得るのだが、学生たちは、この猟師の行為について、2人を救出したのちに、オオカミの腹に石を詰めてから縫い合わせているところに着目した。実際、原作では、のどの乾いたオオカミが水を飲もうとしたところ、石のせいで体が重くて井戸に落ちて死んでしまっている。このエピソードから学生たちは、被告人猟師は赤ずきんちゃんたち2人が襲われていることを奇貨として、かねてから不仲であったオオカミ（舞台名は大神寛太）を正当防衛の名の下で殺害しようとしたものである、という公訴事実を作り上げた³。

今年度のオープンキャンパスは8月3日土曜日に開催された。週明け月曜日から定期試験の始まる時期で、毎年のことながら、学生たちにとっては落ち着かない時期ではあるが、今回も懸命に取り組んでくれた。学生たちを讃えたい。(2024年12月4日脱)

2 赤ずきんちゃんとおばあさんの2人が襲われている反面、襲ったオオカミが死亡したということから、正当防衛かそれとも過剰防衛かという展開で事件化することもゼミ内では検討したが、見学の高校生にはいささか議論が細かくなりすぎるのではないかということで、この案は採用しなかった。

3 NHKの番組「昔話法廷」では、赤ずきんちゃんを被告人とし、刑法39条の責任能力を争う展開となっている。すなわち、猟師ではなく赤ずきんちゃんがオオカミの腹に石を詰めたという設定で、いわば猟奇的な殺人をしているというところからの展開である。なお、この番組を収録した書籍としては、NHK Eテレ「昔話法廷」制作班編・坂口理子原作・イマセン法律監修『昔話法廷 Season 4』（2019、金の星社）61頁以下。

開廷・人定質問

被告人が拘置所職員に連れられ入廷し、着席している（勾留事件）。※解錠。やがて、裁判官が登場。

裁判長「それでは、被告人 ^{かり た いくぞう} 狩田育三に対する殺人被告事件の審理を始めます。

被告人は、そこの前の席に座ってください」

被告人、証言台の席につく。

裁判長「名前を何と言いますか」

被告人「狩田育三です」

裁判長「生年月日はいつですか」

被告人「1994年11月29日です」（※いて座。いい肉の日。）

裁判長「仕事は何ですか」

被告人「猟師をしています」

裁判長「本籍はどこですか」

被告人「福岡県 ^{さらくら} 皿倉郡 ^{や はた} 八幡村 ^{えだみつ} 枝光591番地 です」

裁判長「住所はどこですか」

被告人「本籍と同じです」

起訴状朗読

裁判長「それでは検察官、起訴状を読んでもください。被告人はよく聞いていてください」

検察官、起訴状を朗読する。

黙秘権の告知、被告人・弁護人の陳述

裁判長「ここで被告人に注意しておくことがあります。被告人には黙秘権があります。答えたくない質問には答えなくてかまいません。また、法廷で話したことは、あなたにとって有利な証拠にも不利な証拠にもなりますからよく考えて発言してください。ただし、黙秘というのは、黙っているということであって、積極的にうそを言うことが認められているわけではありません。わかりましたか」

被告人「はい」

裁判長「その上で尋ねますが、先ほど検察官が読み上げた公訴事実の内容に、どこか間違いはありますか」

被告人「私が^{おおかみ}大神さんの腹を裂き、そこに石を詰めたことは認めます。しかし、腹を裂いたのは、丸のみにされた^{あか}赤田^だ幸子^こさんと^{はな}花子^こさんを助けるためですし、そのあと、石を詰めたのは、大神さんに気付かれないうちに、そこから逃げるための時間を稼ぐためです。見つかりでもしたら、もう一度襲われるのではないかと警戒したからです。大神さんを殺したくてこんなことをしたわけではありません」

裁判長「その、『こんなこと』とは、腹を裂いて石を詰めたことという意味ですか」

被告人「そうです」

裁判長「わかりました。では、弁護人の意見はいかがですか」

弁護人「被告人と同様です。まず、被告人の行為は殺人罪として評価されるべきではありません。被告人は、本件大神さんによって丸呑みにされた赤田幸子さんと孫の赤田花子さんを助けるために、やむを得ずに、大神さんの腹を

裂いたのです。他に2人を助ける手立てはなかったからです。また、その後、被告人が大神さんの腹に石を詰めたのは、救出したことが大神さんにバレないようにするためであり、さらにまた、赤田さんたちを確実に救うため、そこから避難するための時間を稼ぐために必要だったからです。これらの行為によって、被告人は2人を無事に救出することができ、その結果、大神さんに丸呑みにされた赤田さんたちは命を救われることとなりました。もし、被告人が救出しなければ2人は死んでいたはずです。以上のことから、本件これらの行為は正当防衛として評価されるべきであり、被告人は無罪です」
裁判長「被告人は元の席に戻ってください」

被告人、元の席に戻る。

冒頭陳述

裁判長「それでは検察官、冒頭陳述を行ってください」

検察官、冒頭陳述書を読み上げる。

裁判長「続いて、弁護人は弁論要旨を述べてください」

弁護人、弁論要旨を読み上げる。

証拠請求

裁判長「それでは検察官、証拠請求を行ってください」

検察官、証拠等関係カードに基づいて、説明を始める。

検察官「検察官が請求を行う証拠は、証拠等関係カード記載の各証拠です。

まず、検1号証は、被告人の戸籍抄本です。

検2号証は、被害者 ^{おおかみかん た} 大神寛太さんの死体の発見現場である、村の共同井戸の実況見分調書 です。

検3号証は、大神寛太さんの死体の司法解剖の報告書 です。

検4号証は、被告人が事件に使用し、凶器となった包丁の写真とその報告書です。

検5号証は、大神寛太さんの腹に詰められた石の写真とその報告書です。

検6号証は、証人として、^{むらの りんご} 村野林吾 さんです。

検7号証は、同じく証人として、^{くげ なおすけ} 工家直助 さんをそれぞれ請求します。

村野さんは、日頃の被告人と被害者のやり取りや被告人の動機について、工家さんは、被害者が井戸に転落した時の状況について、確認したいと思います」

裁判長「弁護人、何か意見はありますか」

弁護人「検1号証から5号証は同意します。しかし、それ以外は、予断を与えるものですから却下して下さい」

裁判長「すべて証拠採用します。弁護人からは何かありますか」

弁護人「弁護人からは、近隣住民の伊集院京司（いじゅういんきょうじ）さんを証人として請求します」

裁判長「検察官、意見はありますか」

検察官「不同意です。必要ありません」

裁判長「弁護人、伊集院さん についての立証趣旨は何ですか」

弁護人「伊集院さんは、狩田さんと親交の深い人物であるのと、集落の自治会役員をしている関係で、その立場から狩田さんの人となりについて明らかに

したいと思います」

裁判長「わかりました。弁護人の請求する証人についても採用します」

証拠調べ

裁判長「それでは証拠調べに入ります」

検察官、各書面・証拠物を書記官に提出する。書記官は、それらを受け取り、裁判長に渡し、そのあと、書面の写しを弁護人にも渡す。各人、各証拠を確認する。

続いて検察官から証拠の説明がなされる。

検4号証は現場にあった凶器となった包丁であり、検5号証の石は、被告人が凶器で腹を裂いた後に詰められたもの。また、検2号証・3号証の現場の実況見分調書及び司法解剖の結果から、被害者 大神寛太の死亡は、井戸に転落した後であるとみられ、死因は溺死と考えられる。

裁判長「それでは、証人調べを行います。村野林吾さんをお呼びください」

証人、村野林吾がバーを通過して法廷に入ってくる。証言台の前に近寄る。

裁判長「証人は証言台の前の席に座ってください。名前はと言いますか」

証人 村野「村野林吾です」

裁判長「生年月日は？」

村野「1991年11月22日です」（※長野県リンゴの日、いいフジの日）

裁判長「職業は？」

村野「農家です。具体的には、果樹園でリンゴの栽培をしています」

裁判長「住所はどこですか？」

村野「^{ひらの}皿倉郡八幡村平野217番地 です」

裁判長「それでは、これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人は起立してください。その紙（＝宣誓書のこと）に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、証人 村野、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとなあなた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは検察官どうぞ」

検察官「はじめに、あなたが事件当日に見たことについて、教えてください」

村野「はい、狩田さんが赤田さんのお宅に入っていくところを見ました。うちの果樹園の畑は赤田さんのお宅のすぐ近くにあるので、農作業をしながら横目に見ていました」

検察官「そのとき、被告人はどのような感じで赤田さんの家に入っていましたか」

村野「パッと入っていく感じでしたね、なにか焦っているようにも見えました」

検察官「なるほど。続いて、あなたと被告人 狩田さんとの関係についてお聞きします。あなたは被告人のことはご存じでしたか」

村野「はい。狩田さんとは年が近いこともあり、それなりに交流もありました。」

検察官「では、被害者 大神さんについてはどうですか」

村野「はい、大神さんとも何度も話をしたことがあります。大神さん自身から、狩りの成果について何度か自慢されたことがあり、それを聞いて、よくそんなに獲れるものだと感心したものです」

検察官「大神さんは、狩りが上手だったのですね？」

村野「いいえ、ちょっと違うと思います」

検察官「というと？」

村野「昔、大神さんに、何であなたはそんなにも獲物をしとめられるのか尋ねたことがあります。そうしたら、『このあたり一帯に罠を仕掛けて獲物を一網打尽にしている』とか、『効率的だから、他の猟師が捕獲した獲物をこっそりと横取りしたりしている』という返事でした」

検察官「あなたはそれを聞いてどう思いましたか」

村野「そんな狩りの仕方をしていたのでは、いずれ同業者から反感を買うのではないかと思いました」

検察官「被告人は、その大神さんの狩りで、なにか不利益な影響でも受けていたのでしょうか？」

村野「はい、狩田さんと二人で食事に行ったときに『あいつの罠のせいでケガをしてしまった』とか、『あと少しで獲れそうな獲物を横取りされた』とか、いろいろと愚痴をこぼしていました。そのせいで自分の狩りの収穫が減って、生活にも困窮している様子でした。彼の話聞いて、同情した記憶があります」

検察官「つまり、被告人は大神さんのことを快くは思っていなかったのでしょうか？」

村野「そうですね、被告人の口から『あんなやつ、殺してやろうか』と聞いたこともあるので、お世辞にも仲が良いとは言えないと思います」

検察官「それでは、今回の事件前に、被告人と被害者が、例えば直接喧嘩をしていた等、トラブルのようなものはあったのでしょうか」

村野「何度か言い争っているようなところを見たことはあります」

検察官「ありがとうございました、検察官からは以上です」

裁判長「では弁護人、反対尋問はありますか」

弁護人「被告人の『殺してやろうか』という発言は、どこで聞かれましたか」

村野「町の居酒屋と一緒に飲みに行ったときに聞きました」

弁護人「では、その『殺してやろうか』という発言は、酒の勢いでつい言ってしまっただけだということはないですか」

村野「うーん、まあ、あの時は結構、酔っていたみたいなんで、勢いで言ってしまっただけというのは確かにあるかもしれません」

弁護人「そのとき、被告人はどのくらい酒を飲んでいましたか」

村野「べろんべろんになるくらいに飲んでいましたね」

弁護人「弁護人からは以上です」

裁判長「裁判所からお聞きします。その居酒屋での会話ですが、あなた自身はお酒は飲んでいたのですか」

村野「はい、私もかなり飲んでいました」

裁判長「あと、大神さんの狩りの腕前ですが、さほど上手ではなかったけれども、それなりに獲物を捕まえていたということでしたね？」

村野「はい、とても鼻高々に得意げに自慢していました」

裁判長「確認ですが、いわばズルをしていたから、上手ではないけれども猟師として食っていくことができていたという理解でいいのでしょうか」

村野「そういうことになると思います」

裁判長「それから、被告人が赤田さんの家に入っていくところをあなたは目撃したということですが、被告人が中に入っていったからのちも、赤田さんの家の様子についてしばらく見ていたのですか」

村野「いいえ、自分の仕事に移ったのでその後は見ていません」

裁判長「わかりました。戻っていただいて結構です」

村野林吾、出ていく。

続いて、証人 工家直助が出てくる。

裁判長「証人は証言台の前の席に座ってください。名前は何と言いますか」

証人 工家「工家直助 です」

裁判長「生年月日は？」

工家「1974年10月8日です」（※木の日。十＋八→木。）

裁判長「職業はなんですか」

工家「工務店を営んでいます」

裁判長「住所は？」

工家「福岡県小倉市魚町^{うおまち}217番地 です」

裁判長「これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかない
という宣誓をしていただきます。傍聴人は起立してください。証人はその紙
に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、工家直助、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着
席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとな
なた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自
らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求めら
れた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは検察官どう
ぞ」

検察官「事件当日、あなたはなぜ、現場付近にいたのですか」

工家「あの集落の関係者から、『共同井戸が老朽化してボロボロになっている
から修理とメンテナンスをしてほしい』と依頼をされていたので、当日はそ
の作業のために現場に向かいました」

検察官「仕事のために村へ来ていたのですね？」

工家「そうです」

検察官「事件発生当時、村であなたが見たことを教えてください」

工家「大神さんが井戸のほうに歩いてきて、そのあと、井戸に真っ逆さまに転

落するところを見ました」

検察官「それから、あなたはどうしましたか」

工家「その後、井戸に駆け寄り、落ちた大神さんに大声で何度か呼びかけましたが、返事がないどころか、水に浮かびあがっても来ず、どんどん沈んでいったので、これは大変なことだと思い、すぐ村の人達を呼びに行って、みんなで引き上げましたが、手遅れでした」

検察官「時間を少し戻しますが、大神さんが、井戸の方へ歩いていく様子はどんな感じでしたか」

工家「ゆっくり、ふらふらと歩いてきました。その時は、なんか強い酒でも飲んで、酔っ払っているのだろうなと思っていました」

検察官「大神さんは、酔っばらいのような歩き方でしたか、それとも、どこか体の具合が悪そうな感じの歩き方でしたか」

工家「そこまでは何とも言えませんが、やっと歩いているという感じでした」

検察官「それでは、そのあと大神さんは井戸に転落するわけですが、大神さんが転落してから水面に落ちるまでの時間はどれくらいでしたか」

工家「ほとんどなかったと思います。大神さんが井戸に落ちたと思ったのとほぼ同時に、バシャーんと、水に落ちる音がしたので、多分相当早い速度で落ちたのだろーと思います」

検察官「実際には、大神さんの腹には大量の石が詰められていましたが、それを聞いてどう思いましたか」

工家「はい。それを聞いて、実は酒に酔っていたのではなくて、石が重くて歩きにくかったのだし、石を詰められていたからこそ、大神さんはそんなに早く落ちたのだと、納得がいきました」

検察官「あなたは先ほど、大神さんが、水に浮かびあがっても来ず、どんどん沈んでいった、と話されましたが、このことについてはどう思いますか」

工家「それも石を詰められたからだだと思います。大神さんは石が重くて沈んだのだと思います」

検察官「検察官からは以上です」

裁判長「弁護人からはありますか」

弁護人「はい。被害者が沈んだのは石の重さのせいだということですが、あなた自身、それ以外の要因であるとは考えられませんか」

工家「うーん、石のせいで沈んだっていうのが一番ありえると思います」

弁護人「……。そうですか。わかりました。終わります」

裁判長「裁判所からお聞きます。大神さんが水に浮かんでこなかった時のことですが、例えば、本人がカナヅチで泳げなかった、というような様子は感じられませんでしたか」

工家「それは何とも言えません」

裁判長「そうですか、それでは証人は下がっていただいて結構です」

続いて、証人、伊集院が出てくる。

裁判長「証人は証言台の前の席に座ってください。名前は何と言いますか」

証人 伊集院「伊集院京司 です」

裁判長「生年月日はいつですか」

伊集院「1948年10月15日です」(※きのこの日)

裁判長「職業はなんですか」

伊集院「以前はシイタケの栽培をしていましたが、今は無職です」

裁判長「住所はどこですか」

伊集院「福岡県皿倉郡八幡村^{おぐら}尾倉253番地です」

裁判長「これからあなたを証人として尋問しますが、その前にうそをつかないという宣誓をしていただきます。傍聴人は起立してください。証人はその紙に書いてある文字を声に出して読んでください」

傍聴人が起立して見守る中、伊集院、宣誓する。宣誓が終わったら、裁判長は傍聴人を着席させる。

裁判長「証人は今、宣誓したとおりに正直に述べてください。うそをつくとなた自身が偽証罪として処罰されることになります。また、あなたには、自らに関して不利益なことを供述させられない権利があります。証言を求められた場合に、あなたは証言を拒否することができます。それでは弁護人からどうぞ」

弁護人「あなたは今は無職ということですが、地域では何か役員をされていますね？」

伊集院「はい、ボランティアみたいなものですが、地元の自治会の役員を務めています」

弁護人「では、地域のことにしてもお詳しいのですね」

伊集院「まあ、地域の一般人よりは詳しいと思います」

弁護人「あなたと狩田さんの関係はどんなものですか」

伊集院「ご近所さんです。もう私もトシで、日常生活を送るのも一苦労な状態なのですが、狩田さんは、そんな私にいろいろお手伝いをしてくださって、非常に助かっています」

弁護人「具体的にはどんなお手伝いでしょうか」

伊集院「例えば、日常的には、食料品の買い出しに車で町まで連れて行ってくれるとか、切れた電球の交換とか……、いつぞやは私の代わりに粗大ごみの運搬もしてくれました」

弁護人「あなたからみて、狩田さんはどのような人ですか」

伊集院「まさに好青年というべき人です。困った人がいれば自分を犠牲にしても手を差し伸べるような優しい人で、村には、私以外にも彼にお世話になったという人が大勢います」

弁護人「村での被告人の評判は極めて良かったのですね？」

伊集院「もちろんです」

弁護士「狩田さんと赤田幸子さんの関係ですが、これについてはいかがですか」

伊集院「狩田さんは赤田さんのことはよく気にかけていたのではないのでしょうか。赤田さん自身、体が不自由で、私がしてもらっていた以上に買い物の面倒などを見てもらっていたようです。赤田さんのお子さんたちはみんな村を出て行ってしまっていて、一番近くても、息子さんがふもとの町に居るだけだし、一人暮らしなので本当気遣っていました」

弁護士「今出てきた、ふもとの息子さんの娘さんが、つまりは赤田さんからするとお孫さんにあたる人が、今回の花子さんですね？」

伊集院「そうです」

弁護士「今回の狩田さんの行動について、あなたはどう評価しますか」

伊集院「人助けのために、しょうがないことだったのかなと思います。大神さんが亡くなられたことは残念でしたが、狩田さんが今回の一連の行動をとったおかげで赤田さんたちは助けられたわけですから、それで狩田さんが罰を受けるというのは納得できません」

弁護士「弁護士からは以上です」

裁判長「それでは検察官、反対尋問はありますか」

検察官「被告人と大神さんが不仲であったということをご存じでしたか」

伊集院「はい。そういう話は聞いたことがあります」

検察官「では、不仲だったから被告人はこのような行為に及んだのではないですか」

伊集院「ありません。先ほども言った通り、狩田さんはとても優しい人なんです。不仲だからといって、人を殺すような人ではありません」

検察官「……。検察からは以上です」

裁判長「裁判所からはありません。証人は下がっていただいて結構です」

被告人質問

裁判長「これから被告人質問をします。被告人は、前の席に座ってください」

被告人、証言台の前の席に座る。

裁判長「まず弁護人からどうぞ」

弁護人「当日、あなたが赤田さんの家に行ったのはどうしてですか？」

被告人「あの日はたまたま狩りがうまくいって、せっかくだから赤田さんにも
おすそ分けしようと思い、訪ねてきました」

弁護人「そうしたら、家の様子が変わった、ということに気が付いたのですね？」

被告人「はい。玄関先で『こんにちは、狩田だよ』と呼んだのに、全く返事が
なかったのです。いつもならば、赤田さんは返事をしてすぐに出てくるのに、
返事が全くなかったのです。玄関の戸が開いたままなので、留守ではないの
だろうと思い、裏庭にも回って、家の周りを一周したのに赤田さんの姿が見
当たらなかったのです」

弁護人「それで家の中に入ってみたのですね？」

被告人「はい。そしたら赤田さんのいつも寝ているベッドの上に、大神さんが
いびきをかいて寝ていたのを見て、何事かと思ったのです」

弁護人「やがてそうこうするうちに、大神さんの腹の中から叫び声が聞こえて
きたのですね？」

被告人「はい。赤田さんとそのお孫さんの花子さんの声で、口々に『ここよー』
とか、『助けてー』とか、『早く出して』とか聞こえてきました」

弁護人「それで2人を助けたということですね？」

被告人「はい」

弁護人「あなたが大神さんの腹を裂くのに使った包丁はどこにありましたか」

被告人「台所です」

弁護人「あなたが事前に用意していたわけではないのですね？」

被告人「もちろんです」

弁護人「2人を救出してから、大神さんの腹を縫い合わせたのはどうしてですか？」

被告人「やはりそのままでは、今度は、大神さんの生命が危うくなるかもしれないと思ったからです」

弁護人「弁護人からは以上です」

裁判長「検察官からありますか」

検察官「あなたは今、大神さんの生命が危うくなるかもしれないと思ったから、縫い合わせたというけれど、実際には、大神さんの腹に石を詰めてから腹を縫い合わせていますよね？」

被告人「はい」

検察官「どうして石を詰めたのですか？ そんなことをせず、縫い合わせてすぐ、そのまま逃げればよかったのではないですか？」

被告人「いえ。2人が逃げた後に、また襲われるとまずいと思ったのと、石でも詰めていたら、動きにくくなるんじゃないかと思ったからです」

検察官「石がおなかに入っていたら、のどが渴いて井戸に行くだろう、と考えていたのではないのですか？」

被告人「そんなことはありません」

検察官「なぜそう言い切れるのですか？」

被告人「赤田さんは、おすそ分けに行くと、こちらが何も言わないのに、いつも飲みきれないほどのお茶を出してくれるからです」

検察官「終わります」

裁判長「裁判所からお尋ねします。包丁は赤田さんの家の台所にあったということでしたね？」

被告人「はい」

裁判長「包丁を使おうと思ったのはどうしてですか？」

被告人「急いで何とか2人を救わなくては、と思いながら、家の中を見回したら、台所に包丁があったのが目に留まったからです」

裁判長「では、糸と針はどうしたのですか？」

被告人「これも赤田さんの家のものです。赤田さんは時々裁縫をしているので、居間の隅に裁縫道具がありました」

裁判長「あなたは日頃から、赤田さんの家に上がることも多かったのですかね？」

被告人「はい」

裁判長「わかりました。被告人は元の席に戻ってください」

被告人、元の席に着く。

論告・求刑、最終弁論、最終陳述

裁判長「検察官、論告・求刑を行ってください」

検察官「被告人は、被害者大神さんとは、自身の稼業である猟師の仕事について、いわばライバルの関係にあり、また、大神さんから狩りの邪魔をされるなど、迷惑も被っていました。以前より、こうしたことから、自分の生活の困窮ぶりは、被害者大神さんのせいだとして逆恨みをし、ときには殺意を抱くほど不仲でした。被告人が今回犯行に及ぶ動機には十分な理由がありません。そして、今回、たまたま大神さんにより、赤田さんたち2人が襲われたことを奇貨として、正当防衛であるかのように装い、手の込んだ殺害を実行するに至りました。本来であれば、2人を救出したのちは、そのまま逃げるか、あるいは大神さんの事を思えば、そのまま腹を縫い合わせれば事足りるはずなのに、被告人はわざわざ石を詰めてから縫い合わせています。被告人は、確実に逃げるためだとして弁明を繰り返しますが、到底信用できません。以上のことは、検察官提出の各書面・証人から十分に立証できています。相

当法条適用のうえ、被告人に対し、懲役12年を求刑します」

裁判長「弁護人、最終弁論を行ってください」

弁護人「被告人は、自身の稼業がお世辞にもうまくいっていない状況にありながらも、赤田さんをはじめ、村の人々を気遣い、世話をよく焼いていた好青年であり、このことは村中の評判となっています。当日も、たまたま狩りがうまくいったからと、おすそ分けのために赤田さん宅を訪問したのであり、その際、偶然にも、大神さんにより2人が襲われている事実を知ったわけです。被告人の行為は正当防衛です。その上で、それでも極力、大神さんに害が及ばないよう、大神さんの腹を縫い合わせてすらいいます。被告人は殺人として起訴されるに至っていますが、仮に被告人が殺人を起こそうとして、こんなにも都合よく実現できるでしょうか。今回、大神さんは井戸に転落して死亡してしまいましたが、それは不幸な事故に過ぎません。被告人は無罪です」

裁判長「被告人は前の席に座ってください」

被告人、証言台の席に座る。

裁判長「これで審理を終わりますが、最後に何か言っておきたいことはありますか」

被告人「今回、大神さんが亡くなったのは残念なことです、しかし、私はあくまでも、赤田さんたち2人を助けようと思ってしたまでです」

裁判長「以上ですか」

被告人「はい」

裁判長「それではこれで結審とします。次回公判は、判決を言い渡します。期日は8月3日、15時05分としたいと思います、弁護人、検察官よろしいでしょうか」

弁護人「はい」

模擬裁判シナリオ：「赤ずきんちゃん」

検察官「はい」

裁判長「それでは被告人は、８月３日15時05分、出廷してください」

(了)

起訴状

2024年6月7日

九州国際大学地方裁判所 福岡支部 御中

九州国際大学地方検察庁 福岡支部
検察官 検事 グレーテル

下記被告事件につき公訴を提起する。

記

本籍：福岡県血倉郡八幡村枝光 591 番地

住所：本籍に同じ

職業：猟師

勾留中 狩田 育三

1994年11月29日生

公訴事実

被告人は、2024年3月26日午後2時頃、福岡県血倉郡八幡村平野161番地所在の赤田幸子宅において、たまたま同所を訪問していた被害者大神寛太（当時28歳）が、赤田幸子及びその孫である赤田花子の2名を襲っていたことを奇貨として、日頃から不仲であった大神を殺害しようと企て、正当防衛の口実で同人の腹を裂き、井戸に転落させ、以って溺死させたものである。

罪名及び罰条

殺人 刑法第199条

冒頭陳述書

九州国際大学地方裁判所 福岡支部 御中

2024 年 6 月 14 日

被告人 殺人

狩田育三

九州国際大学地方検察庁 福岡支部

検察官 検事 グレーテル

検察官が証拠により証明しようとする事実は、下記の通りである。

記

第一 被告人の身上・経歴

被告人は、1994 年 11 月 29 日、福岡県^{さくら}倉^や郡^{はた}八幡^{えだみつ}村^{かりたじゅうたろう}枝光 591 番地 に狩田 銃太郎とその妻^{ななこ}縄子の三男として出生し、鳥獣保護法に定める第一種狩猟免許を取得後は、被告人と同様に猟師として仕事をしていた父親の指導を受けながら、猟師としての仕事に従事し、現在に至っている。

第二 本件犯行に至る経緯及び状況

一 被告人は、かねてより、年齢も近くまた居住地も近隣であることから被害者^{おおかみかん た}大神寛太と交流があり、また、被害者が被告人と同様に猟師として生業を営んでいる関係で、被害者とは仕事上のかかわりも深かった。

二 被告人は、被害者大神とは猟師として同業であることから競業者の関係にあるところ、被害者から狩猟の妨害をされたり、また、被害者が狩猟のために正当に仕掛けていた^{わな}罠に自らがかかったりなどしたとして、被告人にとっては、単にライバル関係にあるというにとどまらず、むしろ不快な相手であり、ときには殺意を抱くほどに憎らしい存在であった。

三 他方、被告人は、福岡県^{さくら}倉^や郡^{はた}八幡^{えだみつ}村^{かりたじゅうたろう}平野 161 番地在住の近隣住民である赤田幸子と

も親交があり、同人が高齢で一人暮らしをしていることから、日常的に赤田宅を訪問しては、同人が生活に不便をきたすことが無いよう気を配り、また、時折、狩猟によって入手したものを届けるなどをし、同人の生活に気づかいをするなどをしていた。

四 被告人は、2024年3月26日午後2時頃、いつものように赤田宅を訪問したところ、普段ならば来意を伝えれば返事があるなどすぐに同人からの反応があるのに対して、当日はこれがなく、また、玄関ドアが開け放たれたままになっているなどの状況から不審に思い、赤田宅に上がり込んだ。すると、寝室では本件被害者大神が寝ており、ほどなくして大神の腹部のあたりから「助けて」などという赤田幸子及びその孫である花子の声が聞こえてきたために、2名を救出する名目であれば正当防衛の口実で日頃から疎ましく思っていた大神に復讐できるものと考え、被害者の殺害を思いついた。

五 被告人は、被害者大神の腹部を裂き、赤田幸子及び花子の両名を救出したのち、大神の腹部を縫い合わせる際、石を詰めてから縫い合わせれば、石の重みでそのまま大神を井戸に転落させ、以って溺死させることができると考えた。その後被告人の計画通りに、被害者大神がのどの渇きを覚え、井戸に水を汲みに行くことで、大神は井戸に転落し、死に至ったものである。

第三 情状

被告人は、猟師という生業を通じ、被害者大神とは同業のライバル関係にあったのみならず、時には被害者から迷惑を受けるなどしていた事情があったとはいえ、勝手に逆恨みをし、さらには殺意を抱き、たまたま赤田幸子及び花子が生命の危機に瀕していたという状況を奇貨として、正当防衛の口実で本件犯行に及んだものである。被告人は、いたずらに正当防衛の主張を繰り返すのみに終始し、本件犯行への反省、悔悟の念を一切示しておらず、情状は悪質である。

以上

令和 6 年(わ)128 号

被告人 狩田育三

弁論要旨

九州国際大学地方裁判所 福岡支部 御中

2024 年 6 月 21 日

弁護士 ヘンゼル

第一 基本的主張

本件は、被告人が、本件被害者とされる大神寛太^{おおかみひろた}氏の腹を裂き、そこに石を詰めたとという行為につき、それらが殺意を以ってなされたものであるとして、殺人罪で起訴されたものである。しかし、被告人が腹を裂くという行為に至ったのは、本件大神氏によって丸呑みに^{まるの}された赤田幸子^{あかださちこ}と、その孫である赤田花子^{あかだはなこ}の 2 名を救出するため、やむを得ずに行ったからであり、また、大神氏の腹部に石を詰めた行為は、2 名を救助したのちに、確実に避難する時間的余裕を作るためであった。すなわち、被告人が行った本件各行為は、すべて人命の救助のためになされたものであり、正当防衛が成立する。なお、本件大神氏が死亡している点につき、被告人の行為が防衛の程度を超えた行為ではないかという反論が仮になされるとしても、同氏の死因は井戸に転落したことによる溺死であり、これは不幸な事故というほかなく、過剰防衛にあたると評価することも適切ではない。被告人は同氏を直接死に至らしめたわけではないのはもとより、被告人において同氏の転落を予見することも不可能であるから、被告人にその責任を追及するのは失当である。被告人は無罪である。

第二 正当防衛について

正当防衛は、急迫不正の侵害に対して、自己又は他人の権利を防衛するために、やむを得ずにした行為である。本件において、大神氏が赤田幸子と花子の 2 名を丸呑みにしたことは、2 名の生命に対する急迫不正の侵害と言わねばならない。そして、被告人が大神氏の腹を裂いたのは、丸呑みにされた 2 名を救助するためのものであるから、この行為は当然に、急迫不正の侵害の要件を満たす中での行為と考えるのが相当である。なお、被告人が大神氏の腹を裂いた際に用いた包丁は、赤田幸子宅にあったものであり、本件当時たまたま台所付近にあったものに過ぎない。

第三 殺意について

検察官は、正当防衛であれば、被告人が大神氏の腹を裂き、2名を救出したことでその目的を達成しているものであり、その後、大神氏の救命のためには、単に腹部を縫合すればそれで十分であるにもかかわらず、実際には被告人は大神氏の腹に石を詰めてから縫合しているのであるから、そのゆえを以って、これが殺人の故意の表れだと主張する。しかし、この石を詰めたという行為は、丸呑みにされた赤田幸子と赤田花子の2名を救助したことを大神氏に感づかれなくようにするためのものであった。つまり、この行為は、救助したことに気づかれて、大神氏によって再び丸呑みにされてしまうという危険を回避するためのものであり、これは、殺意の表れなどでは決してなく、正当防衛の一部をなしているものである。

第四 死因について

本件大神氏の直接的な死因は、被告人に腹を裂かれたことでも、また、腹に石を詰められたことでもなく、のどの渇きを覚えたことで、井戸水をくみ上げようとした大神氏が不幸にして井戸に転落したことによる溺死、すなわち事故死である。被告人において大神氏の転落は予見できないばかりか、同氏が注意していれば転落することもなかったものであり、それを被告人による殺人とするのは失当である。

第五 結論

被告人は大神氏の腹を裂き、石を詰めたが、それらはすべて人命救助のために必要であったからである。本件は、被告人による救命行為がなければ、罪のない2名の命が失われていた事案であることを考慮すると、この行為は正当防衛として評価するほかない。被告人は無罪である。

以上